



# 飯と汁

川口松太郎

講談社版

飯 と 汁

---

昭和35年 2月15日 第1刷発行

¥ 290

|       |                        |
|-------|------------------------|
| 著 者   | かわぐちまつたろう<br>川 口 松 太 郎 |
| 発 行 者 | 野 間 省 一                |
| 印 刷 所 | 豊国印刷株式会社               |

---

株式 講 談 社  
会 社

(製本 大製)

waguchi 1960. PRINTED IN JAPAN

乱丁本はお取りかえいたします。

飯

と

汁

装 幀 岩 田 專 太 郎  
題 字 直 木 久 蓉

「偉くなりたい」

と、いうのが二人の口ぐせであった。

「本当に偉くなりたい」

と、会えばいつも同じ事をいう。偉くなりたいたい目標が生活の全部だ。

「偉くなる」という言葉の中に二人の人生の一切が含まれている。一つにはそういう時代でもあったのだ。大正十年で、信吉は二十二、千吉は二十歳。浅草公園のうしろの、大溝の前の飯屋の床几に腰を下し、飯と汁のどんぶりを前に並べて、

「偉くなりたいたいなあ」

と、嘆き合うのが殆んど毎日であった。信吉の家は今戸で、千吉の家は清島町にあり、時間を計って落ち合つて偉くなる将来を夢想する。

「俺は画で食えるようになるだろうか」

と、千吉は思い、

「小説で生活出来る時代が来るかしら」

と、信吉は疑がう。信吉は文学志望で、千告は画家志望だ。何処でどうして知り合つたのか、何時の間にか友達になり、何時の間にか人生を語り、毎日会わなければ不安になり、会う場所は大抵飯屋のテーブルであつた。六区から合羽橋へ抜ける大通りに幅二間の大溝があつて、その前の高い鉄の柵が公園と市街地とを区別していた。その大溝の前の騎西屋という飯屋が二人の食堂で、馬方や人力車夫や露店商人等、浅草で働く労働者のための一膳飯屋だ。平べったいどんぶりへ米の飯を山盛りに盛りあげるのが特長で、大盛り中盛り小盛りの三種類があり、大盛りは五錢、中盛りは三錢、小盛りは二錢、信吉も千吉も中盛りで充分だ。おかずはいろいろ出来るが名物の味噌汁は一杯二錢。大どんぶりへなみなみと注いでくれるが、実は何にも入っていない。店の正面に大きな鍋をかけ何時でもぐらぐらと味噌汁が煮え立ち、煮え立った汁をどんぶりに入れ、テーブルへ運んでもまだぐらぐらおどっている。テーブルの上には大きな薬味箱があり、こまかくきざんだ葱がこれも山盛りに盛り上げてある。実のない煮立った味噌汁へ、きざんだ生葱を一掴み入れると、程よい葱の味噌汁になり、それへ薬味の唐芥子をちょっぴり落し、一錢のお新香を注文し、三錢の中盛りと二錢の味噌汁と一錢のお香香で飯を食う。漬けものは、大抵菜漬と沢庵で、紅生姜が一切れその上に乗っている。毒毒しい紅の色が浅草の飯屋らしく、飯と汁と漬物で合計六錢。湯気の立つ中盛りの飯と、ぐらぐら煮えたつ汁と一錢の漬物と、生きて行くために必要な最下等の食い物だが、二人とも不平はいわなかった。飯を食い終ると分厚い湯呑みで番茶を飲みながら、偉くなる目を空想する。テーブルの真ん中には大土瓶が置いてあり、六錢の客には給仕をしてくれる筈もなく、勝手に注いで勝手に飲み、何時間いても苦情はいわない。店

がたてこむのは夕方の五時から八時くらいまでで、その他はいつもがらんとしている。床は一面の御影石で、何時もホースで洗い流して殆んど乾いた事がなく、濡れている石の上の長床几に腰を下し、飯と汁のどんぶりを前にしていると、六区の呼び込みや、玉乗りのジンタや、芝居のお囃子などがごちゃまぜに流れて来る。

「俺の小説が売れて、お前の画が挿画に使われればいいな」

空想の最後はそんな現実に落ちて来る。魚や汁や漬物や雑多な匂いのしみ込んだ大テーブルに頬杖をついていると、空想は果しもなく、

「俺は鑄木清方になるのだ」

と、千吉は力み返る。彼は風俗画家志望で春信や歌麿や清長などの影響を受け、美人風俗を描きたい夢が、鑄木清方を崇拜し、

「俺は森鷗外だ」

と、信吉は鷗外の作風に夢をのせ舞姫や高瀬舟はその文章さえも暗記している。

「そんなに好きなら清方の弟子になればいいじゃないか」

と、信吉はいい、

「君だって鷗外の弟子になれよ」

と、千吉はいう。清方も鷗外も所詮は夢の中の人物で、

「清方を学んだところで飯は食えない」

と、千吉は思い、

「鷗外のような小説を書いたって買う人はない」



と、信吉も諦めている。二人とも貧乏人の子で、信吉の父は左官職人であったが一昨年死に、千吉の父は印刷屋の勤め人で京都に住み、信吉は蠟燭町の大勢新聞に勤め千吉は石版印刷の下画描きをして辛うじて食べている。三銭の飯と二銭の汁で遠い夢を見ている生活なのだ。

「飯と汁か」

と、苦笑して向い合う二十二の新聞記者と二十歳の下画描きとは、六区の裏の飯屋のテーブルが生きて行く場所であった。

「どうすれば偉くなれるんだ」

「いい作品を書けばなれる」

「書いたって載せてくれる所がないじゃないか」

「自信のあるものを書いて売り込みに行ったらどうだ」

「誰に売り込むんだ」

そんな現実的な話もする信吉の積極的な日もあれば、千吉の強っ気な日もある。千吉が強くなると信吉が弱くなり、信吉が強くなると千吉が弱くなる。結局は二人とも自信がなく、口先だけの強がりですきもの売りに行く勇氣もない。飯と汁で腹がふくれると、六区を歩き、瓢箪池の橋を渡り、水族館の裏を抜け、花屋敷の横丁から宮戸座の前へ出て、小遣いがあれば立見へ入る。なければ絵看板を暫く見て、富士横丁から田町へぬけ、吉原土手を越えて山谷堀の堀ぎわ伝いに今戸橋のたもとへ出る。何処まで歩いても話はつきない。話しても話しても話したような気がしない。今戸橋から一町ほど行くと、左側に今戸八幡の石の鳥居があり、その境内のうしろに信吉の家があるのだ。鳥居の手前が今戸焼き屋で、その隣りに、都鳥の煎餅屋があり、店の

表には竹で編んだ網の上に鳥形の煎餅が並べて乾してある。今戸に生れて今戸に住みながら都鳥の煎餅は滅多に食べられない。値段が高いからだ。一日に焼く枚数が決っていて、前から注文して置かないと買う事も出来ず、貧乏人には食べられない。この煎餅屋の隣りに太田長介という作家がいた。作家で歌人で博文館の講談雑誌という雑誌の編集長をしている。

「かくまでに秘めねばならぬ恋なるか。たまには人に語りても見たき」

と、いう長介の歌に感激して信吉は手紙を出した事があった。彼は感激すると手紙を出す癖があるのだ。そして、

「訪ねて行ったら会ってくれるかも知れない」

と思っていたが、

「会ったって仕方がないじゃないか」

と、千吉は相手にしなかった。

「あの人は講談雑誌の編集長をしているから何か相談に乗ってくれそうな気がするんだ」

「君が小説を書いて僕が挿画を描き、一組にして持って行ったらどうだ」

「講談雑誌は仲仲有名人が書いているし鈴木せんざいという名で時代小説を書いているのは劇作家の鈴木泉三郎なんだから、僕らに出来そうもない」

今戸の町通りを歩きたびごとに話し合ったが訪ねて行く勇氣はなかなか出なかった。

「初めて人を訪ねて仕事をさせてくれと頼むのはいやしい」

と、思ったし、偉くなりたい夢と、食べて行かねばならない現実とは何時も並行している。千吉の夢は鍋木清方であり、信吉の夢は森鷗外であり、理想を鷗外に置いて、現実を太田長介に求

めるのもうしろめたい気がしたのだ。が然し結局は二人とも太田家を訪ねて長介氏に会った。温厚善良な好人物で、

「通俗な読物を書く意志があるのならコマ絵小説というものを書いて見給え。原稿用紙一枚を一回にして十回か十二回のストオリを書き、一回に一枚ずつの絵を描いて」

と、親切に教えてくれた。現代物でも時代物でもどっちでもよいという。

「みる。当って砕けるじゃないか」

と、千吉は誇り顔だった。信吉がためらっているのを、千吉が押し出すようにしたのだ。

「折角親切にいつてくれたんだからうまく書かなくっちゃいけないな」

「書くような筋があるか」

「一回一枚で十二枚だから筋を書くだけの事だ」

「失敗して見捨てられぬようにうまく書けよ」

二人ともすっかり真剣になった。

「偉くなる」目標には遠い仕事だが、生活の為めの実収入が貰える。信吉は「怪談千鳥ヶ淵」という十二回の怪談小説を書き、千吉も一回に一枚ずつの画を描いた。

雑誌も八月号だったので怪談の思いつきが成功し、

「僕の方でも怪談物が欲しいと思っていたのだからちょうどいい」

と、褒めてくれて一発で採用になり、信吉の原稿は一枚二十五銭、千吉の画は一枚五十銭で買ってくれ、即座にお金を払ってくれた。現金の入った袋を買って二人とも茫然とした。びくびくしながら、持って来た原稿がすらすらと金に変わってしまったのだ。

「画の方が割がいいな」

「コマ絵小説だから割がいいので普通なら原稿十枚に画が一枚の割だろう」

「初めての原稿料と初めての画料だな」

「何に使う」

金袋を握るとすぐ浅草へ帰って来た。浅草以外の場所は何処も知らず、遊ぶのも食べるのも、見るものもみんな浅草。

「広養軒へ行こうか都へ行こうか」

と、電車の中の二人の顔が、幸福でとろけそうになっている。信吉は洋食屋の広養軒のお絹に惚れ、千吉は日本料理屋の都のお竹に惚れている。二人が惚れているだけで先方は何とも思っていない。広養軒のお絹も都のお竹も浅草の名物娘でお竹には「結婚反対聯盟」というものが出来、新国劇の沢田正二郎がその会長になっている、という程度に有名なのだ。広養軒は観音劇場の前にあり、都は仲見世の裏にある。お絹は濃艶なヴァンプ型で、お竹は可憐な娘型だ。

「俺は都へ行くから君は広養軒へ行けよ」

と、千吉は妥協しない。

「初めて原稿料を貰ったんじゃないか。冷たい事いうなよ」

と、信吉は千吉に引きずられる。都へ行っておさしみと壺焼きで飯を食って六十銭。広養軒でカツレツと飯なら三十五銭。二人とも酒は飲まない。六銭の飯と汁に馴れた舌には都のおさしみも広養軒のカツレツも最上の贅沢だ。雷門で電車を降りると、仁王門をくぐって観音堂へ上り初めての原稿料収入に感謝してお賽銭を上げた。お詣りをすませると何時ものようにぶらぶら歩き出

したが、二人とも気持ちに張りが出来ている。偉くなれそうな心持が少しだけし初めている。清方や鷗外の夢には遠すぎるが、然し画と小説で金が取れたのだ。たとえそれがコマ絵小説であつても、結城信吉、岩井千吉画と並んで印刷されるのだ。

「俺はやっぱり都へ行くよ」

と、千吉は仲見世へあと戻りをし初めた。急にお竹の顔が見たくなつたのだ。思い立つと不意に駆け出したり、ばかりと何処かに居なくなつてしまつたり、そんな事の平氣な男で、仲見世通りをさつさと後へ引つ返して行く。信吉は苦笑しながら尾いて行つた。何時もなら別れてお絹の顔を見に行くのだが、今日は別れたくなかつたのだ。都は腰かけの小さな呑み屋で五六坪のせまい場所にござたテーブルが並んでいる小料理屋。娘のお竹で繁昌している。この日はまだ午後の三時頃で、お客の少い店先へ結綿に結つたお竹が花のように美しく、

「ずい分お早いですね」

と、千吉を見て、

「何かいい事があつたんですよ。岩井さんの笑っている顔珍らしいわ」

と、いった。無口なお竹にしては珍らしいほど愛想がよく、千吉は崩れそうな顔をしてテーブルへ坐つた。

お竹もお絹も千吉や信吉を相手にはしなかった。二十二歳の文学青年と二十歳の画学生ではどうしようもなかったし、二人とも顔を見ているだけで十分なのだ。酒場も喫茶店もまだない時代で、すし屋そば屋汁粉屋洋食屋ミルクホール等に、人目を惹く娘がいると、忽ちお客が集って来る。公園中で最も人目を惹いたのがお竹とお絹なのだが、とげられる恋でもなく、とげようとする心でもなく、顔や姿を見ているだけで満足する程度の、子供っぽさであった。

二人の処女作をのせた講談雑誌も間もなく本屋の店頭へ出た。コマ絵小説「怪談千鳥ヶ淵」という活字を見た瞬間、

「墮落したな」

と、信吉は思った。森鷗外と、コマ絵小説とはへだたりが多すぎて悲しみようもなかった。読み返してみると、役に立っているだけの文章で、艶も味も何もなく、千吉の画も小さく縮版されてせせこましく見え、二人とも何となく顔を見合せた。どっちも、喜ぶ気にはなれないのだ。夢は高い所に浮んで遠く、現実の仕事は自己嫌悪を感じさせるばかりだ。

「文学とは縁遠い」

「美術とは縁遠い」

顔を見合せて暗澹としたのも飯屋のテーブルだった。飯と汁の外に五銭の煮魚を特別に注文し、初めての仕事に満足するどころかすっかり自信を失って、

「太田さんもう仕事をさせないだろう」と、思ったが、実際はその反対で、数日後には博文館へ呼び出され、

「毎月コマ絵小説を書くように」

と、いわれた。未熟な通俗ストーリーが案外好評だったらしい。五十銭あれば一日たっぷり楽しめる時代では、一枚二十五銭の原稿料も大きな魅力で、千吉の画料五十銭は重要な生活費になる。彼は前山重治と同居して清島町に住み、石版の版下を描いていたのだが、講談雑誌の小さいコマ絵が他の編集者の目にとまって、文芸倶楽部や人情世界などから挿画の注文がどかどか来た。女の顔の美しさと、描線の新らしさが買われて、俄かに認められ出したが、信吉の小説には何の反響もなかった。

「画人は技術の修練が土台だから画描きとして一人前に通用するまでは挿画で勉強する」

千吉はそんな気になり出していたが信吉は全く暗中模索だった。太田長介の紹介で、文芸倶楽部などへ短かい雑文を書き出していたが、むろん人の目にふれるようなものはない。忙しくなった千吉は公園をぶらつく暇もなくなり、騎西屋の飯と汁に満足する生活からはぬけ出したが、仲見世の都へは足繁く通うようになった。その程度に収入が増えたのだ。幾分の羨望と、幾分のひがみを感じながら信吉も広義軒へ通った。岩井が画家であつたから、ひがみも羨望もそれほど

深刻ではなかったが、同じ作家であったなら、もっと手ひどい打撃を受けたであろう。

「京都から妹を呼び寄せる事にしたから遊びに来いよ」

と、ある日の千吉はいった。信吉は妹の写真を見た事がありその美しさに驚いてからまだ間もなかったのだ、

「美人の妹が来るのか」

と目を輝やかすと、

「あの写真はよくうつりすぎているので、実際はそれほどでもない。それよりも人情世界の表紙を見てくれたか」

と、すぐに仕事へ話をうつし、

「初めて色つきの表紙を描いたので固くなったが、一生懸命にやったつもりだ」

と、着色の表紙画に昂奮している。

「挿画も表紙も顔と一緒に見える。美しいが変化がない。作品によっては少しずつ変えるべきだと思う」

そんな批評をしたが千吉は否定も肯定もせず、

「お前ももっと書けよ。前山も勉強してろぞ」

と、おびやかすようにいった。一緒の家に住む前山重治は抒情的な小説を書いて少女雑誌へ原稿が売れ、地味ながら少しずつ認められかけている。

「妹は何時来るんだ」

「今週中だ。仕事が増えちゃったんで、誰か居てくれないと困るから呼ぶ事にした」



「お前の方が先に偉くなっちゃったな」

「ヘンな事いうな。偉いというほどの仕事じゃない」

「博文館の雑誌には殆んど描いているじゃないか」

「それは金とれるようになったというだけで、偉くなっただけじゃない」

「俺は金さえも取れない」

二人で太田長介を訪ねてから一年目になる。たった一年で売り出して、千吉風の女の顔は若い少女のあこがれにもなっている。

「お前は出世が早かった」

と、信吉が淋しげると、

「出世というのは、本気で描いた画で認められた時の事で今の仕事は身すぎの職人だ。こんな仕事を出世といわれちゃやりきれねえ」

と、千吉はいやがったが、信吉にすればやっぱり、

「生活のたつという事が先ず羨ましい。小新聞勤めを早くやめ文章で飯の食えるようになりた  
い」

「文章にもよりけりだぞ。講談雑誌へ書く文章では生活がたつても満足はしないだろう」

「問題はそこだな」

「低俗な作家で有名になるのもいやじゃないか」

「むろん厭だが、さりとて森鷗外には縁遠い」

「鷗外の夢と現実生活のバランスだな。俺だって挿画画家では満足しないが、そう簡単には清方